

大学生の時間的展望の構造に関する研究

過去・現在・未来の満足度の相対的關係に着目して

奥田 雄一郎

問題と目的

■時間的展望研究とは

時間的展望とは Lewin(1951/1979)によれば「ある一定時点における個人の心理学的過去、および未来についての見解の総体」と定義されている。人間はその生涯発達過程の中で、それまで生きてきた自らの過去を振り返り、そしてまた、これからといったまだ見ぬ自らの未来について考えを巡らせる。このように人間が現在という時間から過去や未来といった時間に対してどのような展望を抱くのか、あるいは、それらの過去や未来というものが現在の発達にどのように影響しているのか、そしてそれらの展望が他の心理学的概念とどのような関係にあるのかを研究する心理学分野が時間的展望研究と呼ばれる研究分野である(奥田, 2002)。

奥田(2002)では、従来の時間的展望研究の問題点として第一に、過去展望についての研究が不足していたこと。第二に、過去展望、あるいは、過去・現在・未来すべての時制を研究するための方法論が必要であるということ。第三に、過去・現在・未来の各時制間の関係が明らかにされてこなかったこと。第四に、個人の時間的展望に対する他者の役割が明らかにされてこなかったこと。第五に、従来の時間的展望のモデルでは時間的展望の形成過程、変容過程の説明ができないことの五点を挙げた。本研究は上記に挙げた第二、第三の問題に関する研究である。

■時間的展望の構造:過去・現在・未来の関係

奥田(2002)において指摘したように、従来の多くの時間的展望研究は過去・現在・未来というそれぞれの時間を独立のものとして扱ってきた。あるいは、未来だけ、過去だけといったように、過去・現在・未来の時間のいずれかのみ焦点を当てて研究を行ってきた。過去・現在・未来の全てを対象としている研究においても、分析の段階において過去・現在・未来といったそれぞれの時間についての変数がどのように関係しているのかを研究している研究はあるが、問題や方法の段階から過去・現在・未来の関係という視点を取り入れている研究は少なかった。

数少ない過去・現在・未来の関係という点に着目した研究としては、概念化に関する研究として Frank(1939)や勝俣(1995)らによる研究がある。また、奥田(2005)では、Lewinの

場の理論を援用し、時間的展望の構造、つまり、過去・現在・未来がどのように関係しているのかについて理論的に検討した。実際に各時間の関係という視点を研究に取り入れた実証研究としては徳田(2004)や奥田(2002b)、奥田・半澤(2003)がある。徳田(2004)は、11名の子育て中の母親に対するインタビュー調査を行い、ナラティブ・アプローチの視点から自らの人生に対する意味づけのパターンを抽出している。奥田(2002b)では大学生 25 名に対するインタビュー調査から、過去と現在の関係を〈きっかけ・変化〉、〈感情〉、〈役に立っている〉、〈関係ない〉、〈その他〉の 5 つに分類した。また、奥田・半澤(2003, 2004)、奥田(2005)では、過去・現在・未来の出来事の関係の総体を時間的展望の構造と概念化し大学生に対する調査を行った。奥田・半澤(2003)では、大学新生に対して質問紙調査と面接調査の両面から大学生の時間的展望の構造について調査した。その結果、時間的展望の構造の一つの現代的なパターンとして、就職などの未来の目標を持ちながらも、その未来の目標と現在との間がないといったかたちで構造化をしている学生の存在を指摘した。

奥田(2005)で指摘したように、人間にとっての時間は過去だけ、あるいは未来だけといったようにばらばらに経験されるのではない。Schütz(1970/1996)が「現在のいかなる経験も、その経験にいたる過去の諸経験の総体から自らの意味を受け取り、また同時に、多かれ少なかれ空虚な予想によって未来の諸経験とも結びついている」と指摘したように、人間の時間を研究するには過去・現在・未来という総体を一つの分析単位として扱う必要がある。そのため、本研究では、過去・現在・未来を独立のものとして扱うのではなく、その関係に着目し、時間的展望の構造へのアプローチを試みる。

■時間的展望の構造を研究する研究法

奥田(2002)において指摘したように、従来の時間的展望研究においては大橋・鈴木(1988)、奥田(2003)、白井(2001)などのいくつかの研究を除き、多くの時間的展望研究が未来についての展望を中心としたものであり、過去や現在については未来に向かっての付属的なものとして捉えられてきたという問題点がある。そのため、その方法論についても未来展望を中心に議論されており、過去・現在・未来という時間の全体性を捉えようとする研究は少なかった。

これは、時間的展望という概念をどのように定義するのかという点に起因している。例えば先に挙げた Lewin(1951/1979)は時間的展望の対象として心理学的過去および未来、とその対象を現在から見た心理学的な過去や未来としている。また、Frank (1939)は時間的展望を「心理学的未来や過去を現在の事態に関連づける過程である」と定義し、同様に、勝俣(1995)は「時間的流れ(持続)の中におけるある時点での、個人ないし、集団・社会の過去展望、現在展望及び未来展望の有機的関連の総体」と定義している。Frank や勝俣の立場は過去・現在・未来という全ての時間を対象とするとともに、それらの関連を強調していると言えよう。それに対して Wallace(1956)は「個人的未来の出来事にかんする時間的調節と配列化」と時間的展望研究の対象を未来に限定している。従来の時間的展望研究の多

くは、Lewin や Frank らと問題関心は共有するものの、方法としては Wallace と同様の視点を取ってきたと言えよう。

これまでの時間的展望研究の代表的な研究法は都筑・白井(2007)によってさまざまな方法が紹介されているが、過去・現在・未来の関係を研究するための方法としては、奥田・半澤(2003)では、過去・現在・未来の重要な出来事を5個ずつ研究協力者に挙げさせ、それらの出来事が自分の時間の総体の中でどのように構造化され、位置づくのかを協力者に当てはめてもらった。

本研究では時間的展望の構造へのアプローチとして、過去・現在・未来に対する満足度に着目する。自らの過去・現在・未来への満足度を尋ねることによって、具体的な出来事間の関係をとらえることはできないが、過去・現在・未来の相対的関係をとらえることができると考えられる。なぜなら、研究協力者は「過去に比べれば現在は」あるいは「現在に比べれば未来は」といったように、回答時にはそれぞれの時間の相対的評価を求められる。本研究では、そこから得られた過去・現在・未来の満足度の得点を独立に扱うのではなく、研究協力者がそれらの時間をどのように相対的に評価し、時間的展望の構造へと位置づけたのかに着目し、そのような時間的展望の構造を用いて研究協力者を分類する。つまり、本研究では過去の満足度の得点、未来の満足度の得点といったように、過去だけ、あるいは未来だけの各時間について研究するのではなく、また、過去・現在・未来を切り離して検討するのでもなく、それらの関係に着目した研究アプローチを目指す。

■本研究の目的

以上のことから本研究の目的は以下の二点である。

第一に、時間的展望の構造によって目的指向性や希望、現在の充実感、過去の受容といった時間的展望の下位尺度に差があるのかを検討すること。

第二に、時間的展望の構造のパターンによる特徴を明らかにすることである。

方法

研究協力者：2007年10月から11月にかけて関東の大学2校の学生、175名に調査協力を依頼し、有効回答162票を得た(男性68名、女性92名、不明2名)であった。年齢範囲は18歳から32歳であり、平均年齢は19.98(SD=1.99)歳であった。

調査内容：1)時間的展望体験尺度(白井, 1994)。18項目(5段階評定)であり、白井(1994)によって、将来の目標があるか、そのために何か準備をしているかといった目標指向性因子、自分の将来に希望が持てるか、将来を自分で切り開く自信があるかといった希望因子、現在の生活が充実しているか、現在の生活に満足しているのかといった現在の充実感因子、過去を受け入れることができる、過去の出来事にこだわっていないといった過去受容因子の4つの下位因子が確認され、その信頼性と妥当性が確認されている。2)過去・現在・未来の満足度についての質問項目。過去・現在・未来のそれぞれについて1.満

足していないから、4.満足しているまでの4件法で尋ね、その理由を自由記述で回答してもらった。自由記述の部分については本研究では分析に使用しない。

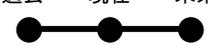
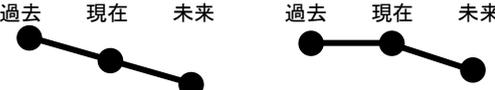
分析：本研究では過去・現在・未来の満足度の相対的關係によって表1に示した5群に協力者を分類した。なお、本研究では先にも述べたように過去・現在・未来に対する満足度よりも、その各時間の間の相対的關係に着目し分類した。例えば

協力者A：過去1. 満足していない・現在は2. やや満足していない

協力者B：過去3. やや満足している・現在は4. 満足している

という2者は同一の категорияに分類している。満足度、という点にのみ着目するのであれば、この両者は通常別の categoriaに分類されるだろう。しかしながら、過去に比べれば現在は満足度が上昇しているという点においては同一とみなすことができる。つまり、本研究では過去・現在・未来のそれぞれの時間に満足しているかではなく、過去・現在・未来を総体として、相対的にどのように関連付けているのかに着目するからである。そのため、どれだけ満足しているのか、ではなく、過去に比べれば現在は、現在に比べれば未来は、といったようにそれぞれの相対的關係から、過去・現在・未来を総体としてどのように関係付けているのかという点に着目し分析を行った。

表1. 各カテゴリーにおける過去・現在・未来の相対的關係

カテゴリー名	満足度得点推移イメージ	説明
①無変化群	過去 現在 未来 	過去・現在・未来の満足度の値が変わらないもの。
②満足度上昇群	過去 現在 未来 過去 現在 未来 	過去・現在・未来の満足度の値が上昇するもの。
③満足度下降群	過去 現在 未来 過去 現在 未来 	過去・現在・未来の満足度の値が下降するもの。
④現在満足群	過去 現在 未来 	過去と未来の満足度は低いが、現在の満足度は高いもの。
⑤現在不満足群	過去 現在 未来 	過去と未来の満足度は高いが、現在の満足度は低いもの。

結果

各カテゴリーの内訳は

- ①無変化群(N=39 男性16名 女性23名:満足度全体平均=3.00 過去満足度平均=3.00 現在満足度平均=3.00 未来満足度平均=3.00).
- ②満足度上昇群(N=46 男性19名 女性27名:満足度全体平均=2.83 過去満足度平均=2.07 現在満足度平均=2.89 未来満足度平均=3.54).

- ③満足度下降群(N=28 男性 15名 女性 13名:満足度全体平均=2.80 過去満足度平均=3.32 現在満足度平均=2.98 未来満足度平均=2.11).
- ④現在満足群(N=24 男性 7名 女性 17名:満足度全体平均=2.51 過去満足度平均=2.04 現在満足度平均=3.30 未来満足度平均=2.17).
- ⑤現在不満群(N=23 男性 11名 女性 12名:満足度全体平均=2.78 過去満足度平均=3.17 現在満足度平均=2.04 未来満足度平均=3.13)であった.

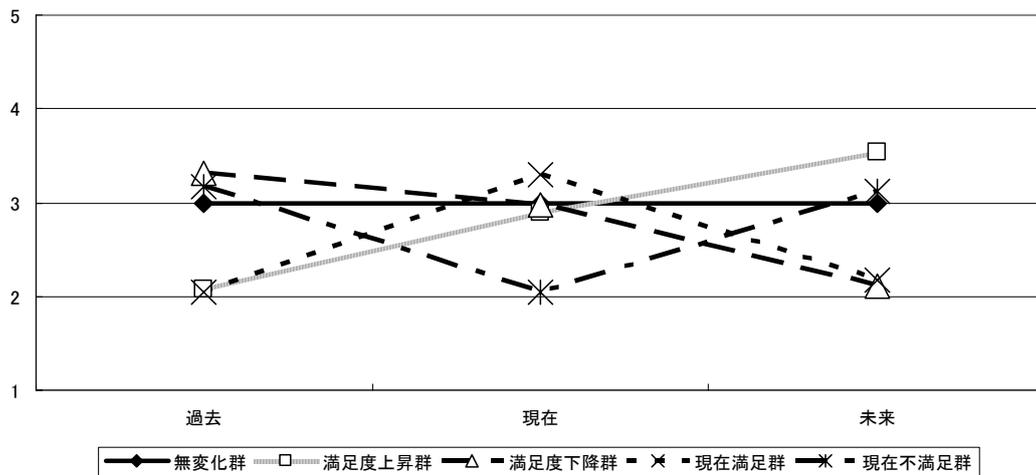


図 1. 過去・現在・未来の関係群毎の満足度平均得点推移

時間的展望体験尺度は、目標指向性下位尺度の平均点と標準偏差は 3.24(SD=0.97)であり、希望下位尺度の平均点と標準偏差は 2.90(SD=0.90)、現在の充実感下位尺度の平均点と標準偏差は 3.74(SD=1.13)、そして過去受容下位尺度の平均点と標準偏差は 3.15(SD=0.86)という結果であった。

①無変化群, ②満足度上昇群, ③満足度下降群, ④現在満足群, ⑤現在不満群の 5 群間で時間的展望体験尺度の 4 つの下位尺度の得点に有意な差があるかどうか一元配置の分散分析を行った結果を以下の表 2 に示す。

表 2. 過去・現在・未来の関係の群別各平均得点, 標準偏差

	①無変化群 n=39	②満足度上昇群 n=46	③満足度下降群 n=28	④現在満足群 n=24	⑤現在不満群 n=23	F	Tukey
目標指向性	3.28(1.05)	3.69(0.96)	3.02(0.98)	2.84(0.80)	3.45(0.72)	3.60*	②>③④
希望	3.02(1.05)	3.38(0.70)	2.73(0.95)	2.37(0.89)	2.99(0.60)	5.03**	②>③④
現在の充実感	3.77(1.25)	3.88(1.01)	3.80(1.22)	3.36(1.19)	3.76(0.98)	n.s.	
過去受容	3.38(0.95)	2.94(0.64)	3.29(0.88)	2.64(1.02)	3.22(0.67)	3.74*	①③>④

** p<.01, * P<.05

過去・現在・未来の関係の 5 つの群の間での目標指向性下位尺度の各平均得点の間には有意な差があることが示された($F(4,156)=3.60, p<.05$). そこで多重比較(tukey)を行ったところ②満足度上昇群と③満足度下降群④現在満足群の平均得点の間に有意な差が見られた($MSe=3.60, p<.05$).

過去・現在・未来の関係の 5 つの群の間での希望下位尺度の各平均得点の間には有意な差があることが示された($F(4,157)=5.03, p<.01$). そこで多重比較(tukey)を行ったところ②満足度上昇群と③満足度下降群・④現在満足群の平均得点の間に有意な差が見られた($MSe=3.71, p<.05$).

過去・現在・未来の関係の 5 つの群の間での過去受容下位尺度の各平均得点の間には有意な差があることが示された($F(4,157)=3.74, p<.05$). そこで多重比較(tukey)を行ったところ①無変化群・③満足度下降群と④現在満足群の平均得点の間に有意な差が見られた($MSe=2.59, p<.05$).

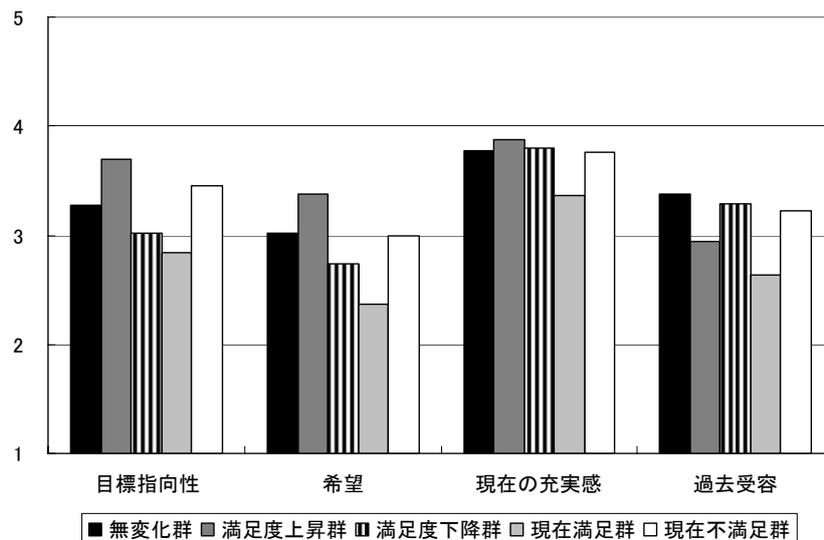


図 2. 過去・現在・未来の関係の群別各平均得点

以下に各群の特徴を示す。

①無変化群は時間的展望体験尺度の下位項目の内、目標指向性、希望、現在の充実感、過去受容において、過去受容においてのみ現在満足群と有意な差が見られた。過去受容においては、唯一他の群と比べても平均得点が高かった。

②満足度上昇群は、時間的展望体験尺度の下位項目の内、目標指向性、希望、現在の充実感、過去受容において、目標指向性、希望の得点が、満足度下降群・現在満足群に対して有意に高かった。また、過去受容以外の下位尺度では全て最も得点が高かったが、過去受容に関しては、現在満足群の次に得点が低かった。

③満足度下降群は、時間的展望体験尺度の下位項目の内、目標指向性、希望、現在の充実感、過去受容において、目標指向性、希望において満足度上昇群に対して有意に得点が低く、過去受容においては、現在満足群に対して有意に得点が高かった。

④現在満足群は、時間的展望体験尺度の下位項目の内、目標指向性、希望、現在の充実感、過去受容において、目標指向性、希望については満足度上昇群に比べて有意に得点が低く、過去受容については無変化群、満足度下降群に比べて有意に得点が低かった。また、全ての下位尺度において、最も得点が低かった。

⑤現在不満足群は、時間的展望体験尺度の下位項目の内、目標指向性、希望、現在の充実感、過去受容において、他の群との有意な差は見られなかった。しかしながら、希望の下位尺度において、現在満足群と比べて有意に得点が高い傾向が見られた ($MSe=3.71, p<.10$)。

本研究で特徴的だったのは、過去や未来に比べ現在に対する満足度が高いとした現在満足群が、時間的展望体験尺度の下位尺度である目標指向、希望、過去受容において、他の群に比べ有意に得点が低かったことである。また、有意な差は見られなかったものの、現在が他の時間に比べ最も満足度が高いとしたにもかかわらず、現在の充実感についても他の群と比べ最も低い得点であった。

考察

本研究では過去・現在・未来の満足度からそれぞれの時間を相対的にどのように構造化しているのかという点から時間的展望の構造化のパターンを 5 つの群に分類し、それぞれの時間的展望の特徴について検討した。全体的にみると、本研究において特徴的であったのは②満足度上昇群と④現在満足群であった。ここではこの二つの特徴的な群について考察する。

従来の時間的展望研究の枠組みでは未来に対する満足度が高いほど、つまり未来に対して明るい展望を抱いているほど、他の変数の値も高くなるという傾向が見られた。しかしながら、本研究では未来に対する満足度が高い大学生らもその時間的展望の構造によって②満足度上昇群と⑤現在不満足群の二つの群に分類される。両群ともに未来に対する満足度は 3 点を超えており、本研究の研究協力者らの中では未来に対して明るい展望を抱いていると言える。しかしながら、両群の時間的展望の構造は異なる。②満足度上昇群では、過去よりも現在、現在よりも未来の方がより満足できる、という時間的展望の構造を有しているのに対して、⑤現在不満足群では過去に比べて現在は低く、現在に比べて未来の満足度が高いという時間的展望の構造を有する。②満足度上昇群は目標指向性、希望、現在の充実感の得点が他の群に比べて最も高く、これが従来の時間的展望研究が未来志向と呼んだタイプと考えることができるだろう。このように、時間的展望の構造という新たな視点を取り入れることによって、これまでとは異なったタイプの特徴を明らかにすることができた。したがって、未来展望を考える際には単に未来展望のみに着目するのではなく、

過去・現在・未来がどのような関係にある中でどのような未来展望を抱いているのか、という時間的展望の構造に着目する必要があると示唆される。

近年、大学生の現在主義化が指摘されている。本研究で言えば④現在満足群がこれに当たるとであろう。その意味では、④現在満足群は現代に特徴的な時間的展望の構造を持つタイプと呼べるかもしれない。例えば、池田(2001)によれば、モダンの社会は「未来志向」的社会であり、そこでは「限らない進歩、発展への信憑の元、「直線的な時間」の先によりよき「未来」が設定され、それが生活史のスタイルに取り込まれることによって、生の虚無は大方回避される」社会である。しかしながらポストモダンの社会である現代社会においては「人々は次々と変化する「現在の出来事」に対処するのに精一杯であり、よりよき未来を設定し、それに向けて現在を制御するということが困難」となり、「人々は常に、「過去」(伝統、記憶の蓄積)や「未来」(目指すべき理想、絶対的な目標)に必ずしも保証、担保されない「現在」の時点から、「前提」あるいは「基準」なき「選択」の連続によって、自己の時間を組織していくしかないのである」とされている。時間的展望研究の分野においても現代社会の青年の現在主義化は、刹那主義といった言葉で指摘されてきた。本研究においては、この④現在満足群を十分に検討することができなかつた。今後は例えば、大学への適応といった他の変数との関連を検討しながら、この現代社会に特有な時間的展望の構造を検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Frank,L.K, 1939 Time perspective. *Journal of Philosophy*, **4**, 293-312.
- 池田径 2001 現代的自我における時間意識－現在志向と自己物語－,社会学雑誌(神戸大学社会学研究会),**18**,140-157.
- 勝俣暎史 1995 時間的展望の概念と構造. 熊本大学教育学部紀要(人文科学), **44**, 307-318.
- Lewin,K. 1951 *Field theory n social science : Selected theoretical papers*. New York : Harper & Brothers.
- 奥田雄一郎 2002 時間的展望研究における課題とその可能性－近年の実証的、理論的研究のレビューにもとづいて－,大学院年報(文学研究科篇:中央大学), **31**, 333-346.
- 奥田雄一郎 2002b 大学生の過去展望に関する研究(1)－大学生は過去の出来事をどのように現在と関連づけているのか－, 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, **325**.
- 奥田雄一郎 2003 物語としての時間－時間的展望研究に対する物語論的アプローチの可能性についての検討－, 論究, **35**, 1-16.
- 奥田雄一郎 半澤礼之 2003 大学生の時間的展望の構造についての研究(I)－新入生は自らの過去・現在・未来をどのように構造化しているのか－, 第11回日本青年心理学会大会発表論文集, 42-43.
- 奥田雄一郎 半澤礼之 2004 大学生の時間的展望の構造についての研究(II)－過去・現在・未来の出来事に対する評価－, 第11回日本青年心理学会大会発表論文集, 52-53.

- 奥田雄一郎 2005 生涯発達における時間の構造—時間的展望の構造に関する理論的検討—, 論究, **37**, 165-176.
- Schütz, A. 1996 生活世界の構成. (那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝, 訳). 東京: マルジュ社. (Schütz, A. 1970 *Reflections on the Problem of Relevance*. Yale University Press).
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究, 心理学研, **65**, 54-60.
- 白井利明 2001 青年の進路選択に及ぼす回想の効果—変容確認法の開発に関する研究 (I)—, 大阪教育大学紀要 第IV部門, **49**, 133-157.
- 徳田治子 2004 ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ:生涯発達の視点から, 発達心理学研究,**15**,13-26.
- 都筑学 白井利明 編著 時間的展望研究ガイドブック, ナカニシヤ出版.
- Wallace, M. 1956 Future time perspective in schizophrenia. *Journal of Abnormal & Society Psychology*, **52**, 240-245.

Abstract

A study of Time Perspective Structure in University Students

Approach from relations of past, present and future

OKUDA Yuichiro

Purpose:

Time perspective is defined as “the totality of the individual's views of his psychological future and his psychological past existing at a given time.” (Lewin, 1951). The purpose of this study was to clarify how five time perspective structure group differed in regard to the time perspective.

Method

In this study, participants were 162 1-4th grade college students. They were administered the following two questionnaires: 1) Time perspective experience scale (Shirai,1994), composed of 18 questions concerning goal orientation, hope, present fulfillment sentiment and attitude for past. 2) Question of Satisfaction (past, present, and future)

Result

The main results were as follows. Satisfaction increase group show more higher point of goal orientation and hope than present satisfaction group. From the above results, it was suggested that time perspective structure is important aspects of time perspective studies.